■ 編集後記

この3月末（平成7年）を持って編集委員の任を辞することになりました。編集に関わりを持つようになってから久しく、十何年かになると思います。その間、沢山の先生方から投稿があり、歯科領域全般にわたるいろいろな内容の論文を拝見することが出来ました。

本会誌は多彩な内容を示す論文の集まりですが、学会誌である以上、ある程度の体裁を整えることが必要です。野坂編集委員長を中心に、どの学科の方にも分かるように、言葉使いや語句の表現方法にも気を配りながら、分かりやすく、立派なものになるよう心掛けて参りました。しかも、その論文にはオリジナリティーが必要です。このようなことは、今後も同じことで、格調の高い立派な論文がどしどし投稿されてくるものと思います。

今年は新年早々に関西大震災、円の急騰（1ドル81円）、社会の不穏当なできごとなど多難な年となりそうです。これまでの沢山のご投稿とご協力に感謝します。　（伊藤忠信　記）

6年前、桜の花咲く頃に始まった本誌編集委員会も、野坂委員長のもと、年間に3号を刊行しつつ、ここに任期を終えることができ、少なからずホッとした心境にあります。

この間、会員諸兄からは編集に関する多くのご意見、ご叱正、ときにはご批判の声などを直接、間接に拝聴してきました。どのような声も、本誌を良くするための一念から出たことであろうと拝察しました。想い起こすとき、当人にとってはごもっとものことばかりであったことと思います。しかし、本誌編集の困難性は、内容はともあれ、歯科医学の基礎と臨床の全般を網羅した総合雑誌であることにあります。それでも、各委員は多事多忙の時間を割いて、自己の責任のもと、出来るだけ客観的立場から、投稿された論文を、少しでもより良きものにするため、ベストを尽くしてきた筈であります。この点、とくに編集委員長の労は多とするものであり、一委員として感謝この上ない次第であります。今後は、また新たな編集委員長のもと、時の推移とともに、会員全体の声をより良く反映させ、かつ紙面のより充実のため、会員ともども務めて頂きたく存じます。　（工藤啓吾　記）

本誌の14巻2号から編集に携わり、早いもので、もう6年にもなる。本誌は一般の学会誌と異なり、歯科の種々の分野の論文を掲載するので、この間、専門外の色々な分野の論文を査読した。査読することで専門外の知識をいくらかでも吸収する事ができたのが、せめてもの収穫であった。また、専門の分野により論文の様式も多少異なっていることも体験した。編集委員の任期を終えるにあたり、本誌の編集によって得られた知識は明日からの教育に生かせたらと念じている。　（佐藤方信　記）

昭和62年11月1日付けで、本歯学会編集委員に任命されてより、平成7年3月31日で7年5カ月を経過しました。編集委員の最初は、坂巻教授の後任として1年5カ月、その後、2期6年を名和教授および野坂教授の編集委員長のもとで務めさせて頂きました。その間に、152編の論文を読ませて頂きました。内容的に、基礎関連や臨床関連のものなどがあり、理解するのが困難なものもありました。内容について、専門外のひとにも分かりやすく、解説してもらえれば、読者つまり、会員にとって有益ではないかと思います。基礎と臨床、つまり医療と歯学が共同して研究を医療の現場に生かさなければ、歯科医学の発展はありえなく、論文を書くための研究になってしまうと思えます。本年は歯学部創立30周年になりますが、諸先生のご健勝とご活躍を祈念して退任の挨拶に代えさせて頂きます。

（松丸健三郎　記）

20巻1号の編集をもって6年間の編集任務を終わらせて頂き、新しい編集委員の方々に業務を引き継ぐことになりました。この間、編集委員一同は、全力投球で任に当たってきました。投稿者のうちには、編集者の言葉が足らず不快な思いをされた方もあったことと思います。しかし、歯科医学全般にわたる論文を、公平に判断することは大変なことでした。ただ本誌の編集に携わり、一つだけいえることは、良い論文は、解明出来たことと、解明出来なかったことが、明瞭に示されているということです。ご多忙の中、ご苦労頂きました編集委員各位に心より御礼を申しあげます。次号からは新しい編集委員長のもとで、新しいコンセプトで編纂され、本誌が益々発展されることを祈って、任を終わらせて頂きます。　（野坂洋一郎　記）